

## THE ROTARY CLUB OF KARIYA



Weekly



2015～2016年度 国際ロータリー K.R. ラビンドラン 会長テーマ

Be a gift to the world 世界へのプレゼントになろう

創立 1954年3月8日  
承認 1954年3月30日例会日時 毎週月曜日  
12:30～13:30  
例会場 刈谷市新栄町3の26  
刈谷商工会議所内  
事務所 TEL <0566>22-2111  
FAX <0566>25-2111  
メール kariyac@katch.ne.jp  
ホームページ http://www.kariya-rotary.com  
会長 加藤 真治  
幹事 兵藤 文男  
会報委員長 山下 雅則

この会報は、地球環境保全に考慮し再生紙を使用しています。

## 第2916回例会プログラム

[当年度=26回目；当月=3週目]

2016年（平成28年）2月15日(月)

## 1. 例会……………〈司会：プログラム委員会〉

- 12:28 1. チャイム  
12:30 2. 点鐘……〈会長〉  
3. 開会宣言  
4. ロータリーソング斉唱  
……それこそロータリー  
5. 講師・ゲスト並びにビジター紹介  
6. 食事

- 12:45 7. 会長挨拶並びに会長報告  
8. 幹事報告  
9. 出席報告  
10. 委員会報告  
11. ニコニコボックス報告  
12. 次週並びに次々週のプログラムの予告  
(2/20) ……

西三河分区 IM

13:00～リリオコンサートホール・  
ホテルクラウンパレス知立

※2月22日(月)の例会変更分です。

(2/29) ……クラブフォーラム

(国際奉仕委員会)

卓話 「グローバル補助金事業報告」

講師 国際奉仕委員会

委員長 神野 公秀 会員

## 13:00 13. 本日のプログラム

卓話 「車いすドクターズの活躍」

講師 元TG ウェルフェア

高山幸四郎 様

(紹介者 嶋津 孝久 会員)

14. 謝辞  
15. 点鐘……〈会長〉  
16. 閉会宣言

13:30 17. 散会

## 出席席

会員総数 96名 出席免除 24名  
出席義務者+免除者の内例会出席者 79名  
欠席 7名 出席率 91.14%  
前々回(2/1)の修正出席率 100%

## 会長報告

- 1) 2月8日(月)刈谷音楽協会役員会に出席して参りました。  
2) 2月9日(火)刈谷市国際交流協会役員会に出席して参りました。  
3) 先日、開催されました地区諮問委員会で地区役員及び委員会構成が承認され、委嘱状が届きました。



## 種の大絶滅と進化

加藤 真治



地球の生命は、知られているだけで5回の大絶滅を経験しています。いわゆる「ビッグ5」です。直近に起きた5回目は恐竜やアンモナイトが死に絶えた6500万年前、中生代末の大絶滅です。巨大隕石が中米ユカタン半島に落下したことによる

地球環境の急変が原因とみられています。この5回目は、当時の生物種のおよそ半分が絶滅したと推定されていますから、ビッグ5のなかでも最大だと思われるかもしれません。しかし、この5回目はビッグ5中では最も規模が小さなものでした。最大規模の絶滅は3回目、約2億5千万年前、古生代末の大絶滅です。

この頃、地球では大変動が起きていました。現在を基準として海水面の100mを超える低下、海水のストロンチウム同位体比の急激な低下、深海における海水の酸素欠乏状態の開始といった事象が、同時に進行していきました。こうした地球環境の大変動のため、海の無脊椎動物は三葉虫など約9割が絶滅しました。また、は虫類と両生類はおおよそ7割が消滅しました。こうした大変動がどうして起きたかわかっていませんが、東京大学の磯崎行雄教授は「プルームの冬」と名付けた桁外れの規模のマグマの噴出という地殻の大変動説を提唱されています。

いずれにしろ、数百万年の時を経て、陸地では裸子植物から分化した種子植物の森が誕生し、陸上生物では新たに恐竜と哺乳動物が登場しました。また海では、豊かな森からの栄養素の流入や酸素濃度の回復を受け、軟体動物、甲殻類やウニなど新しい海洋生物が前例のない速さで誕生し多様化していきました。この海洋生物の変化の現象を説明する定説はありませんが、デラウェア大学のR. マイティン達は次のような説を唱えています。

「大陸の風化や種子植物の森の落ち葉の腐敗から出たリンなどの栄養素が、海に流れ込みました。これを受け、古生代を支配した「緑藻類」と呼ばれる謎めいた植物プランクトンから、栄養に富んだ珪藻などの「紅藻類」の植物プランクトンに置き換わっていきました。これら「紅藻類」植物プランクトンの増加に伴い、これを餌とする動物プランクトンが増加し、これが海洋生物の急速な多様性を生み出した。」というものです。

## 「車いすドクターズの活躍」

元 TG ウェルフェア

高山幸四郎 様



私が、車イス修理のボランティア活動と出会ったのは、今からおおよそ20数年前だった。

当時、いろんな企業が社会貢献活動をやり始めたころだったと思う。

それまでにも私が勤めていた豊田化成でも、地域のごみ拾い活動などをやってたが、単発的なもので、従業員に根付いたものとはいえるものではなかった。

私は総務部に籍をおいて業務として社会貢献活動を全社展開する課題をかかえていて、いくつかのボランティアサークルをスタートさせたところだった。そのなかの日曜大工の有志を集めたサークルのメンバーの中に車イスを使う家族がいる社員がいた。「自分たちの技術を生かして車イス修理で社会貢献できないか」。一方、地域の社会福祉協議会からも車イス修理の要望があった。「福祉施設の車イス修理を請け負っていた自転車屋さんが高齢なので仕事をやめたい」という。

しかし、車イスに触ったことのあるメンバーはほとんどいない。車イスの修理に詳しい別に自転車屋さんに頼んで、一から教えてもらった。タイヤがありブレーキがあって、仕組みとしては自転車に共通するものが多かった。

こうして1996年10月車イスドクターズは発足した。メンバーは十数人。我々がお手伝いする福祉施設は4ヶ所だった。会社の休日に訪問し、故障している、あるいは調子が悪い車イスを相手にする。

一度教わったとはいえ、実際にやってみるとわからないことだらけ。メーカーによってビスや部品が違うこと分かり、作業は手探り状態だった。そこはものづくりの会社で働く者たち。自転車好きが多かったこともあるが、次第に慣れていった。私は事務屋で素人だったが、やってみると意外にできた。自分の手でモノを直すのが楽しかった。

発足後しばらくは活発に活動していたのだが、徐々に参加者が減っていった。修理に出かける際は現地集合が基本だが、行ってみたら私を含めて2、3人、時には私一人なんてこともあった。ひとりで20～30台を点検して、修理するのは時間的にも体力的にも辛いものがあった。会社からの活動費の予算も削られ、ゼロになる恐れさえあった。工具は自前のもので、修理用の部品も自腹で購入していた。

この苦境を変えてくれたのは、事務局の女性だった。彼女が知り合いを連れてきて、さらにその知り合いが知人に声をかける。尻込みしていた人の中にも「意外とできるものだね」と言って継続して来てくれるようになった人も少なくない。また彼女は新入社員教育のカリキュラムに盛り込んだり、部次長会や課長会を巻き込んだりして輪を広げていった。

今ではメンバーも30余名となり、平均年齢は45歳ぐらい、子供を連れてきて、一緒に手作業を楽しんでいく人もいます。毎月第2土曜日が活動日で、毎回10～20人が参加してくれる。

最近では、会社からの全面的なバックアップもあり、担当する施設も増えた。豊田合成の事業所がある自治体の施設10数箇所にそれぞれ、半年に1度は足を運ぶ。この1、2年は、静岡県森町や九州地区あるいは東北地区へ出かけることもある。

20年の間に、修理の内容も変わってきた。最も多い作業は、タイヤの虫ゴム交換作業だが、ある施設では、ノーパンクタイヤに切り替えたので、もう修理は不要と言われたり、虫ゴムを使わないタイヤチューブに変わったりしている。折れた鉄の部品は工場に持ち帰って溶接していたが、最近はアルミ製のものが増えて溶接で修理することができなくなってきた。

そんなこともあり、最近は施設の方に使い物にならなくなった車イスを廃棄せずに保管して頂いている。解体して交換部品として使うためだ。メンバーの中には壊れて使い物にならない車イスを解体し、その場で、使える車イスを組み立ててしまう猛者もいる。

どうやって修理するのか見たいらしく、おじいさんやおばあさんに囲まれて作業をすることもある。時には、車イスに乗ったまま「このまま修理してほしい」といわれることもある。

修理を終えた後、「ありがとう」と言われるのがやっぱり一番うれしい。こういう言葉を受けることに慣れていない活動歴の浅いメンバーは照れて恥ずかしそうにしている。仕事では、なかなか「ありがとう」と言われる機会は少ないものだ。この一言があったから、OBとなった今もこのサークルに参加している。